

57 社友法学士合川正道君逝く

〔「法学新報」第四三号 明治二十七年十月二十八日〕

○社友法学士合川正道君逝く

君は元と江州産の人なるか故ありて母氏と共に濃州某地の合川家に養はる年末た弱冠ならざるに家亡ひ寡孤相擘の東京に到り間閔流離備さに艱苦を嘗む君幼にして穎悟行状夙に凡童に異なり長して東京大学に入り明治十四年法学科を卒へ法学士の位を授けらる同十八年元老院権少書記官と為り正七位に叙せられ十九年同院書記官に進み二十一年帝室制度取調委員と為り法制局参事官に転し廿二年官を辞して代言人と為り此の年十一月帝国憲法発布紀念章を授けられ二十三年華族会館調査主任と為り二十四年高等商業学校教授に任せられ文部参事官を兼ね同年従六

位に進叙せられ尋て病を以て官を辞す君又た専修学校英吉利法律学校東京商業学校等に講師たり而して君の最も心を潜めたるは政治学に在りて別に一箇の識見を立つ著す所る英米契約法講義及英吉利契約法講法余論等ありと雖も得意の著は政法第三冊憲法義徳憲法論新政瑣言天爵貴族政治予算私考各々一冊なり皆な世に刊行せらる君人と為る静沈にして温厚なるも又た狷潔にして人と容れざる者あり平素唯読書に耽り敢て聞達を世人に求めず故を以て同学の士と雖とも君の起居を詳する者甚少といふ君数年前より肺患に罹り静養自ら勉めたるも数月来病勢頓に加はり本月一日の夜を以て永眠に就く年三十五惜い哉君の葬儀は本月四日午后三時靈柩瀧山町の邸を出て深川靈岸町の雲光院に於て執行せり此日天雨ふり且つ場所の僻在なるに拘らず会葬者甚だ多く殆んど皆当代の名士なり寺僧の引導了るや鈴木充義氏は学士会を代表して弔詞を述へ高橋捨六氏は専修学校講師に代りて追悼の文を朗読し次に専修学校々友石塚剛毅氏弔詞朗読あり次に土子金四郎氏は東京商業学校講師として君の功績を頌し又東京法学院校友岩波一郎氏弔詞を朗読せり其間一座静肅、哀惜の意自から表はる既にして順次焼香を終り執れも愁然として帰途に就きしは午後六時頃なりし此日東京法学院々友有志総代として岩波一郎氏の朗読したる弔詞は左の如し

○弔詞 東京法学院々友有志總代 岩波一郎

維明治二十七年十月元東京法学院講師徒六位法学士合川正道先生東京ニ卒シ其四日ヲ以テ潔齋素菲ノ典ヲ江東雲光院ニ修ス嗚呼先生天資剛清苟モ人ニ求メス質実外ニ文ラス然レトモ其能大

二用フヘク其学宗トナスヘキアリテ而シテ天之二年ヲ仮サス不幸今日ノ儀ヲ修スルニ到ル哀哉始先生ノ大学ニ在ルヤ其学ヲ講スル理ヲ究ムル一毫モ之ヲ忽ニセス疑必ラス駁ニスルニ非サレハ已マス其既ニ業ヲ卒ヘテ官ニ元老法制ノ両庁ニ仕フルヤ両庁立法ノ府タルノ故ヲ以テ当時国法ノ創定ニ參シ茲ニ必究ノ学才ヲ伸ヘ其枢機ヲ贊ケテ毗補スル所尠カラス一タヒ官ヲ懸ケテ狀師ノ職ニ就クヤ又只心ヲ民瘼ヲ治スルニ專ニシテ其已^{マコ}ノ為メニスルヲ見ス再文部ノ參事官トナリ高等商業学校ノ教授ヲ兼ヌルニ当リテハ其学制ヲ論シ書生ヲ率フル皆夙ニ個人主義ヲ排シ国家教育ノ本旨ヲ明ニシ又嘗テ専修学校及吾東京法学院ノ講師タル諄々教テ倦ムコトナク理ヲ析チテ微細ニ入り問ニ答ヘテ疑ヲ尽サシム痾ヲ養フニ及ヒテ尚力ヲ法学新報ノ編纂ニ致シ病間ト雖モ未タ嘗テ世ヲ益スルヲ忘レス始終事ヲ執リ物ニ接スル控々乎トシテ誠ヲ推シテ其已^{マコ}アルヲ知ラサルカ如シ嗚呼先生ノ学筆シテ以テ世ニ行ハル、モノ数冊ニ過ス其能用セラレテ天下ニ顯ル、モノ亦未タ先生抱負ノ半ヲ尽スニ到ラスシテ而シテ既ニ斯ノ如シ若夫レ天之ニ仮スニ数年ヲ以テシ幸ニ其私ナキノ天縱ト微細忽ニセサルノ資質トニ藉リ之カ全力ヲ尽スヲ得セシメハ其学巍然トシテ偉觀ヲ為シ功業煥乎トシテ百世ヲ照スニ足ルモノアラン其茲ニ到ラスシテ今日アルヲ見ル焉ソ傷惋之至ニ勝ヘサランヤ嗚呼江水悠々流テ海ニ潮シテ復還ラス夕陽既ニ春ヲ零露ヲ降ラントス勁風凄急悲痛懷ニ滿チ悵然極ヲ拜シテ慘爾トシテ復誅スルニ辞ナシ哀哉明靈尚クハ髣髴トシテ只我哀誠ヲ歆ケヨ東京法学院有志總代岩波一郎謹テ吊ス